

Ⅲ. 特別講演

『わが国における乳房温率療法の治療成績』

大阪府立成人病センター診療局長

小山博記先生

第17回新潟乳癌研究会

日時 平成8年7月27日(土)

午後2時～

会場 有壬記念館

2F 大会議室

I. 一般演題

1) 新潟県の乳癌集団検診の評価

姉崎 静記(新潟県村上保健所)

昭和63年より始まった新潟県の乳癌集団検診の7年間の成績について検討した。

検診市町村数が増加するにつれて、発見乳癌数も増加しており、その半分は早期乳癌であった。

新潟県内でも、地域によって検診受診率のバラツキが著明であり、市部は郡部に較べて乳癌発見率が高かった。

検診方式別では、施設検診での乳癌発見率は、出張方式に較べて明らかに高率であった。

乳癌は都会型の癌であることから、今後の乳癌集団検診は、市部での施設検診の推進、拡大が必要である。

現在の一次検診は、視・触診で行われているので、本来の意味での早期乳癌の発見は不可能である。

このためには、一次検診への画像診断の導入が待たれる。

今回の報告は老健法の資料であるが、職域検診との連携も検討しなければならない。

Ⅱ. 主題 画像診断と病理をめぐって

1) マンモグラフィによる乳癌の診断

小林 晋一・清水 克英(新潟県立がんセン)
椎名 真・笹本 龍太(ター放射線科)
佐野 宗明・牧野 春彦(同 外科)

1993年に施行した1,864例のMMGを検討し乳癌診断の問題点を検討した。

1. TP 119例, FN 43例, TN 1,635例, FP 58例.
MMGによる乳癌のSensitivity 73.5%, FN rate は26.5%であった。

2. MMGの乳癌のSensitivityは50歳未満で58%, 50歳以上で83%であった。

3. 乳癌の診断精度を左右する最も重要な因子は乳房の濃度であった。これは、50歳を越えると濃度低下が著しい。

4. FNの原因は画像上描出できないもの32例(乳癌例の19.8%, 32/162), 見落とし6例, 良性疾患と誤診したもの5例であった。

2) 乳癌の超音波診断

—組織型による特性と誤診例の検討—

横森 忠紘・家里 裕
山田 保・小林 功(小千谷総合病院)
落合 亮・坂元 一郎(外科)

最近12年間に216例の乳癌に超音波検査を施行して次の知見を得た。

1) 乳癌に特徴的なエコー所見とその頻度は、①形態不整(91%)②境界悪性量(76%)③不整内部像(71%)④後方像減衰(38%)である。2) 腫瘍径別(2cm以下と以上)による出現率は不整内部像(2cm以上が高頻度)を除いて大差なかった。3) 組織型別に悪性所見の頻度を比較すると、形態不整と境界悪性量は全ての癌に共通し、不整内部像は乳頭腺管癌と充実性管癌に多く、後方像減衰は硬癌に特徴的であった。4) 誤診例を検討すると、非浸潤癌は腫瘤像の描出が診断のカギであり、粘液癌は内部像のIrregularityが診断の決め手である。5) 超音波診断の正診率は92%(2cm以下83%, 2cm以上98%)である。6) 超音波検査による触診診断の補正率は、9%(2cm以下20%, 2cm以上3%)である。